

式 辞

本日は、文部科学事務次官 銭谷真実様、岩手県知事 達増拓也様をはじめ近隣の諸大学及び地域を代表する多数の方々を御来賓としてお迎えし、本学の名誉教授、教職員OB及び同窓会、後援会の方々並びに在籍する多数の教職員の皆様方の列席する中で、本学創立六十周年記念式典を盛大に挙行できますことは、誠に喜ばしいことであります。

人間で申せば還暦に例えられる、この六十年の営みの中で岩手大学は五万九千人を超える有為な人材を世に送り出すことが出来ました。在学生六千人を擁する今日の岩手大学の成長した姿は、ひとえに文部科学省、岩手県及び地域社会からの絶大なるご支援があつての賜物でございます。ここに私は本学を代表して、これまでの各方面からの御支援と御鞭撻に対し、謹んで御礼申し上げます。

さて、本学は戦後の混乱がいまだ冷めやらぬ昭和二十四年五月三十一日に、当時の盛岡農林専門学校、盛岡工業専門学校、岩手師範学校及び岩手青年師範学校の四校を包括して、学芸学部、工学部及び農学部の三学部からなる新制大学 岩手大学として発足致しました。

当時から四十二万平方メートルという広大なキャンパスは変わりませんが、南に位置する農学部から北側の工学部まで、間には実験農場が広がり、視界をさえぎるものは何もなかったと聞いております。ただし『この岩手の地に国立大学が設立される』という知らせは、当時の高校生に『私も国立大学に進学できる』という希望を与えるものでした。新入生の入学定員は四年制課程で三学部合わせてわずかに三百九十名ですが、新しい日本を、新しい岩手を自分たちで創るという、進取の気風に溢れていたことでしょう。

その後、教養部校舎も整うと共に、昭和三十六年には学芸学部が上田キャンパスに移転し、三学部と教養部の学生が一つのキャンパスで学ぶという、岩手大学としての強みが生まれることになりました。しかし昭和四十年代半ばになると、全国の大学は紛争の嵐に巻き込まれます。岩手大学とて同様でした。まさに大学教育の真価が問われる長く厳しい経験でありましたが、戦後第一次ベビーブーム世代の大学への登場、大学大衆化の前触れともいえました。

その一方で、この時期は学科の増設や施設面での拡充も進み、昭和四十六年にはここ第一体育館の竣工、附属図書館の開館をみます。そして工学部には土木工学科、情報工学科などが増設される中、昭和五十二年には、かねてより念願の人文社会科学部設置を迎えるわけです。

その後、平成に入りますと、文字通り大学も比較的平穏な時期を迎えます。社会から大学への関心も、もっぱら入学試験に寄せられていました。といたしますのも、戦後第二のベビーブーム世代が到来し、十八歳人口が二百万人を超えることとなり、国立大学では受験者の増加を定員の臨時増募により対応するなどしていたからです。

その中で、岩手大学では大学院教育の整備・充実が進みました。すなわち平成二年の人文社会科学部研究科、七年に教育学研究科、いずれも修士課程が設置され、博士課程では平成二年に連合農学研究科、八年に工学研究科後期博士課程の設置をみました。このように平成の前半十年間、大学としての教育研究の拡充に努め、ようやく四学部、五研究科というコンパクトながら厚みのある総合大学としての態を整えるに至りました。

しかし、後半の十年はまさに激動の大波に洗われることとなります。国立大学においても民間的発想の経営手法や第三者評価を通じた競争的環境の醸成が求められるようになりました。これらの節目となったのが、五年前の国立大学法人化であったと思います。半世紀以上も国立大学という大きな括りの中にいた岩手大学が、新たな独立した法人としての存在意義を議論し自分たちで合意し運営していくという、大学の総意が問われる試練の時でありました。

その折、私たちは『岩手の“大地”と“ひと”と共に』を行動目標に掲げました。ここでは地域に根ざし、地域に支えられて研究を推進するとともに、有為な人材を育成し、諸々の成果を地域に還元する、そして世界に発信する。これらの一つ一つの営みが、地方の国立大学としての岩手大学の存在感を一層、際立たせるものにつながることを確信して努めてまいりました。そして法人化後、第一期中期目標期間の評価におきましても、堅実・着実な実施状況であるとの評価を頂きまして、これまでの私たちの取り組みについて、いささかの自信を抱いたところでございます。

さて六十年前、初代の岩手大学長に就任した鈴木重雄氏は、新生岩手大学の構想を問われて「これまでは専門学校として専門研究に重点をおいてきたが、これからは社会人の教養を第一義に考え個性の育成涵養に力を注ぎたい」と述べています。さらに「農学部では寒冷地農学研究を、工学部では埋れた未開発資源の開発など岩手の大学という特色を生かすとともに文科的な学部の新設をはかる」ともしています。昭和五十二年に念願の人文社会科学部が設置されたことをみれば、六十年後の現在に通じる方向付けが、このとき既になされていたと言えるでしょう。

暦は還って六十年、現在は、法人化第二期に向けて、岩手大学の強みを活かしながら構想する時期に差し掛かっております。改めて、この六十年の実績を振り返ると、文系から理系までコンパクトでバランスの取れた総合大学として地域とともに歩む姿勢、これこそが本学の存立基盤であろうと考えます。そして岩手大学がこれまで培ってきた誠実で粘り強いという学風は、各層から手堅く高い評価を頂いているところです。

初代の鈴木学長が所信で述べましたように、教育における専門性のみならず、幅広い教養に基づく人格の陶冶が、総合大学における人材育成の要諦といえましょう。これらの活動を通じて、岩手大学に集う多様な学生諸君の夢を実現すること、持続可能な社会を担う人材を育てること、さらに共生という視点に立って地域社会の要望に教育・研究・地域連携の面から応えること、これら使命の達成に向けて教職員が一丸となって誠実に取り組むこと、以上が、岩手大学が地域で信頼される知の府であり続けるための必須の条件となることと思えます。

本日ここに御参会の皆様の前で、以上のように岩手大学の今後進むべき姿勢と私の決意を申し上げる次第です。

改めて、これまで六十年にわたる諸先達、関係各位、わけても文部科学省、岩手県及び地域社会からの絶大なるご支援に感謝申し上げます、私の岩手大学創立六十周年記念式典における式辞とさせていただきます。

平成二十一年六月十三日

国立大学法人岩手大学長 藤井 克己